で。」猿市「りやんごうさい〳〵」。　手でけんをうちながら、兩方から左の手を出し、たがひにけんをうつ手を、握りあい、犬市「サアかつたぞ〳〵。」猿市「エ、いま〳〵しい。そんならこの風呂敷包を、貴樣一所にしよはつせへ。ソレよしか。サアこい〳〵」ト、したくしてせなかをむける。彌次郎是は有難いと、猿市におぶされば、さる市はつれの犬市と心得て、さつ〳〵と川へはいり、なんなく向へわたると、こなたの岸に殘りたる犬市、犬市「ヤイ、猿よ、どうする。はやく川をわたさぬか。」さる市むかうの岸にて聞つけ、腹をたて、猿「コリヤじやうだんな奴だ。たつた今おぶつてわたしたに、又そつちへいつて、おれをなぶるな。」犬市「ばかアいへ。おのればかりわたつて、ふといやつだ。」猿市「イヤ、ふといとはそつちのことだ。」犬市「コリヤおのれ、兄弟子に向つて言語同斷な。早くきてわたさぬか」ト、白い目をむき出し、腹立つる故、猿市しかなく、又こちらへ渡りかへり、猿「サアそんならおぶさりなさろ」ト、背中をいだす。北八しめたと、手をかけておぶされば、猿市又さつ〳〵と、川へは入る、犬市は大

きにせきこみて、「コレ、さる市どこにある。」さる市、川の中にて、「イヤ、こいつはだれだ。」と、北八を川の中へ、どんぶりおとす。北「ヤアリ、たすけてくれ〳〵」ト、手あしをもがき、流れる故、彌次郎飛込み引上れば、頭から骨まで、くさるほどぬれ、北「エ、座頭めが、とんだ目にあはしやがつた。」彌「ハ、、、、、、まづ着物をぬぎやれ。しぼつてやらう。」北「ぜんてへ、彌次さんがわるい。なんのおぶさらずともいゝことに、おめへが手本を出したから、ツイおれも。」彌「川へはまつたか、きのどくな。ハ、、、、、、」夫で一首やらかした。

はまりけり目のなき人とあなどりて、むくいははやき川のながれに。

北「エ、、聞たくもねへ。よしてくんな。ア、寒いさむい、」ト裸になり、がだがだふるへながら、着物をしぼる。此内座頭は川をわたり、行過る。彌「こゝで干てもゐられめへから、着替を出して着やれ。どこぞで火を焚てもらつて、あぶるがいゝ。」北「エエいまいましい。風をひいた。ハアクッシャミ」と、ぶつ〳〵小言を云ひながら、着換を出してきかへ、くさつた着物は絞つて引さげ、出か

けるほどなく、掛川の宿に到る。棒*ばなの茶やをんな。「おめしよヲあがりまアし。鰺とこんにやくと干大根のお吸物もおざりまアす。鮹のせんば煮もおざりまアす。おやすみなさいまアし〳〵。」長持人足の唄「ふけばナア、ふくほどナアアンエ、持物な輕い。ナア、ンエ、綿をサアいれたナア。長持にわたをナア、ンエヨウ、しつたかどうたか〳〵。」馬のいなゝき「ヒイン〳〵。」彌「ヲヤ北八、見さつし。さつきの座頭めらが、あそこに呑でけつかるは。」北「こいつはいゝことがある。おいらを川へはめた、意趣返しをしてやらう、」ト作り聲にて、かの座頭の酒をのんでゐる茶屋へはいる。北「ヲイ御めんなせへ。」茶屋の女「お出でなさいまし」ト茶を汲んでくる。北八かの座頭の傍へ、腰をかける。女「お仕度でもなさいますか。」彌「まだ〳〵腹はぽんぽこなだ。」先刻のざとう二人、此所に休み、酒を飲いたるが、かの二人とは氣もつかず。犬市「ハア、ねつから酒がたらぬやうだ。もう二合やらかさう。」猿市「いかさまな、御亭主〳〵、もうちつとたのみます。」女「ハイ〳〵。」犬市「ときに、今の川へはまつたべらぼうはどうしたら

う。」猿市「それよ。ハ、、、、。先がはりめをやらかさう、」ト、猪口一ばい注いで、一口のみ下におくと、北八そつと手を出し、猪口の酒を飲んでしまひ、ちやつと本の所へおく。猿市「イヤ、太い奴等であつた。ちやんとおれにおぶさりやアがつて、その代水をくらやアがつた時は、たすけてくれろと、悲しいおとぼねを出しをつた。なんでもかすりをとる事ばかり心がけてゐるやつだから、おほかたあいつは、ごまの灰だらうよ。」犬市「さうさ、どうでろくなもんじやアない。あゝいふ奴はこんな所へ來ても、えては食逃げをして、ぶちのめされるものだ。イヤ時に盃はどうした。」猿「ホニ忘れた」ト、猪口を取上げて、飲まうとしたところが、酒は一吸もない。猿市ふしぎさうな顔つきにて、「ヲヤ、こぼしたさうな」ト、其所らあたりを搜りまはし、「ハテ面妖な。改めてさゝう」ト、又一杯つぎ、一口のんで下におくと、北八又そつと引よせ、飲でしまふ。犬市「かうしてゐる所へ、さつきのやつらが來たらをかしからう。」猿市「ナニ彼奴らは、大かた着物を絞つたり、乾したりして、まだあつちにまごついてゐるだらう。

智慧のないべらぼう共だ、」ト、いひながら杯をとりあげた所が、又酒は一吸もなし。「これはどうだ。又こぼしたか。いくぢのない。」猿「イヤこぼしはせぬが、ハテ奇妙頂禮な。」犬「イヤ手めへそんな事ばかりいつて、ひとりで飲むな、」ト、此内、北八銚子を取自分がのんだ茶のみ茶碗二つにあけて、そつと銚子をもとの所へおく、犬「コリヤ猿よ、杯を廻さぬか」ト、ひつたくり、銚子を取て、ついで見て、「ヤ、此猿市め、獨りでくらつてしまやアがつた。」猿「ナアニ、とんだことを、」犬「それでも銚子がさつぱりだ。」猿「なんだ銚子がない。イヤこゝの御亭主〳〵、わしらを盲と侮つて、こんな横着をさしやるか。二合のさけがたつた二口のむと、もうないはどうしたものだ。」亭主「ハイそれは二合しかも、たつぷりついであげましたに、大方こぼしなさつたもんだんて。」猿「ナニこぼすもんだ、商人に似合ぬ事をさしやるから、此酒代ははらひませぬぞ。」ト、大きに腹を立る。此時、門口に遊んでゐる子守が、最前より見てゐたりしが、北八の方へ指ざしをして、子守「ワアイ、座頭どんの酒う。皆なあの人が、茶碗へ注いでしま

はつせいた。」北「ヲヤ、この子はとんだことをいふ。コリヤア茶だ〳〵、」ト、いひながら、のみさした茶碗の酒を、のんでしまふ。亭主「イヤ、お前酒臭いは。そして顔が赤くならしやつたは。大方あの衆の酒をのましやつたな。」北「エ、、この人も同じやうに、途方もねへ。わしが顔の赤くなつたのは、茶に酔たのだ。わしは變つたことで、茶をたんとのむと酔います。酒によつた人は管*をまくが、茶によつた證據には、ちやばかりいふが癖でならぬ。そこでちやばかりながら、どなたもちややうチヤ、ハ、、、、。」猿市「イヤ、その手はくはぬ。子供は正直だ。コリヤこんた衆が横取してのんだにちがひはない。酒代をはらはしやれ。」北「ちやれやれ。ちやりとは、ちやわいもないことをちやべらしやる。ちやつきからのんだはちやばかり、ちやとう衆のちやけを、ちやくぶくしたおぼえはござらぬ。わるいちやれだ。チヤハ、、、、。」犬「イヤそれ、目の見えぬものだと思つて、そのちやらくらおかつしやれ。ハテ、見てゐた子どもが證據人だ。」猿「まだ慥かなことは御亭主あの衆の飲だ茶碗が酒臭いか、嗅いで見さし

やれ、」ト、動かぬところへ氣をつけられ、北八ちやつと、茶碗を隱さうとするを、亭主ひつとり、嗅いで見て、亭主「ヒヤア、臭い〳〵。そして酒でにちやにちやする。コリヤハイお前達が飲ましやつたに違ひない。酒代をおかつしやいまし。」ト、いはれてきた八、こいつは納*まらぬと思ひ、北「イヤちやけはのまぬから、ちやか代は拂はぬ。茶代なら、なんぼでも拂はふ。いくらだ。」亭主「そんなら、茶代をおかしやいまし。茶が二合が六十四文。」北「ヤなんだ。ちやを二合のんだ。とはうもねへ。」彌「エ、めんだうな。拂つてしまつたがいゝ。手めへのするこたア、なんでもをさまらねへ。足許のあかるいうち、拂つてしまや、」ト、目顔でしらせる。北八もせうことなし六十四文はらつてやると、猿「イヤはや、とんだ人たちだ。大方さつきおぶさつたも、こんた衆であらう。人の買つた酒を横取りして飲むといふは、アア泥州といふものだ。」北「ナニどろぼうだ。このどうめくらが」ト、りきみかゝる。彌次郎おしとめ。彌「ハテ、こつちがわるい。モシ量見してくんなせへ。こいつは茶に醉ふと、氣が強くてなりませぬ。サアちやつ〳〵と行かう。アイおちやらば〳〵」ト、いひ捨て北八をむりに引たて、こゝを立出足早に此宿をうち過ぐ。北「エ、いま〳〵しい。けふはとんだ間がわるい。錢を出して酒を飲みながらへこまされたが埋らねへ」彌「ハ、、俺よりは餘程知惠のねえ男だ」

する事もなす事も皆あしくぼや茶にしられたる人のしがなき。

——「東海道中膝栗毛」——

註

鹽井川　『東海道中膝栗毛』第三編の下。「掛川より袋町へ二里十六町」とあるところの一節で、狂言「どふかつちり」から着想して換骨奪胎した場面である。「東海道中膝栗毛」は享和二年から文化六年までに八篇を出し、文化十一年に發端を書き添えた、評判作で、類似の道中記が次々と出た。

○さんな　三。梅は五、りやん は二、ごうは四。

○管を卷く　紡錘にさした管をまく。紡錘の音のぶう〳〵果てしなく言ふ

○納らない　芝居の語。臺本が納まらぬ。役者がふりあてられた役を承引せぬの意。卽結末がつかぬ

柳亭種彦

烏瓜

種彦は、高屋彦四郎知久と云つて、二百俵取のお旗下である。子供の頃疳癪なところから、父が「風にあたまはられて唾る柳かな」と云ふ句で訓戒せられたと云ふ。柳亭と云ふ號もそこにある。初め川柳では木卯、狂歌では柳の風成など、呼んだ、戯作に筆を執つたのも、青年の客氣に驅られたのであらう、彼の作もかなりに多いが、代表作は「諺紫田舍源氏」「正本製」と「邯鄲諸國物語」である。その中、「田舍源氏」は實に滿都の子女を憂殺したもので、その流行はいろ／＼の插語をさへ生んだ。しかしその世評が災して、天保十三年水野越前の改革により絶版を命ぜられた。それで田舍源氏は三十八編を名殘として、その年七月十八日、行年六十を以て種彦は歿した。叱責をうけて間もないので自殺説さへ傳つてゐる。彼の作品を通覽するに大多數は從來の戯曲小説の翻案である、たゞ才筆によつて面白おかしく補綴したのにすぎない。從つてそこに文學的價値を云爲する事は出來ぬ。たゞ娯樂を目的とする民衆藝術として、當代の人々に與へた慰安の大なる點を買ふべきであらう。こゝにはその文情の掬すべきものであるがために揭出した。併し江戸時代にあつては戯作六家選の一として代表的作家として認められてゐたのである。猶用捨箱、還魂紙料等の雜著に彼の特色を忘れてはならぬ。

烏瓜

光氏は只管に、浮世狂ひに假託けて、寶の劍を詮議せんと、心を千々に碎けども夫と思へる事もなし。猶も人の繁き所へ、立入らんには如くべからずと、六條三筋町といへる廓へ、忍び歩きの頃なりしが、かの惟吉が母强く病ひ尼になりける由を聞き、さらば彼を訪ねんと、五條の家に赴きて、門前に駕をとめ、人して斯くと言はせ給へば、惟吉慌てて出迎へ「此程母の病氣につき、暫しお暇蒙りて、御館へも罷出ず、思懸なき御來駕」ト頭を大地にすり付くれば、「いやとよ、汝が母の乳房を、含みし我は成長せり。病に臥すと聞きながら、打捨置くは本意にあらず。案内せよ」ト仰すれば「然らばお駕籠のまゝながら」ト尼を入りて門の戸を開けんとすれど門に、錠を下してありけるにぞ、急はしげに惟吉は鍵持てこんと走り行く光氏は駕籠の簾打かけて、大路の樣を見渡し給ふに、此家の傍に、板垣を疎にしなして、緣先の障子はくわらりと押開き蒲の簾いと

白う、凉しげなるに女のすき影、笑ふ聲など聞えければ、いかなるものの集るならん。われとは見知る者あらじと、駕籠より下りて差覗けば、座敷も二階も奥深からず、物はかなき住居にも、古帷子の解分を、板戸へ張りしを立寄せたる、垣根も折戸も青やかに、心地よげに這ひかゝれる、蔓に白き花のみぞ、己ひとりが笑の眉。「開きしは何なるか」ト問はせ給へば、駕舁く男「あれこそは烏瓜、其名は黒き烏めきて、花は白く實は赤く、かゝるいぶせき垣根にのみ、咲き候」ト答ふるにぞ、「實に此邊は小家がち、打よろぼひし軒のつま、這まつはれるは口惜しの、花の契や一房を、折りもて參れ」ト宣へば、彼男は心得て、此押上げたる網戸の内へ立入れば、年の頃二十に足らぬ顔よき娘黄なるすゞしの前掛し、花にも優る香の肌、白き團扇に打招き、「是に載せて上げ給へ、花は露けく、とが〳〵しき、蔓の茨が美しい、あなたのお手にさはらう」とさもおもはゆげに立出る。折から隣の門の戸を、開いて惟吉罷出で、夫と見るより立寄りて、娘の持ちし團扇の儘、花を受取り御前へ持ち、「門の鍵を置き失ひ、かく騒しき街中へ、置きまゐらせし無

禮の段。しかしあなたを光氏君と、存ぜし者は候まじ。いざ御供」と門の内、駕舁入るれば此方の娘、心ありげに見送りつ、唯うつかりと彳めり。

光氏内に入り給へば、病に疲れし惟吉の、母はやうやう起上り、「髪をおろし容をかへ、憚あれば御館へ參らず、絶えてお顔を拜まざりしが、五戒を有ちし德顯れ、伏屋に至らせ給ひしは、阿彌陀佛の來迎ぞや。是を此世の思出に、彼世へ赴き侍らん」と、さも嬉しげに言ひければ、光氏は涙にくれ「其有樣をつら〳〵見るに、さまで重き病にあらず、心確にもちなして、養生加へ本復なし。まだ年若き惟吉が、世に出づるをも見はつべし。心に障ある時は、佛の國へ到り難し。病のおこたる加持祈禱は、わが祈願所にてせさん、」なんどいと懇に力をそへ、病床を立出で給ひ、惟吉に紙燭を點させ、隣の娘が與へたる、團扇を取りて見給へば

君の光を月かと思ひ浮れいでたる烏瓜

なげ節の唱歌をひとうた、面白う書きたるが、思の外に美しき、筆のすさみに

心動き、「この西隣に住みなすは、いかなる者ぞ」と問ひ給へば、惟吉答へて云へる様「君の知召す如く、久しぶりにて某が、此家へ罷歸りしは、母の病氣の故にして、其事にのみ取紛れ、隣の事は能くも存せず。折節若き女子ども、出入いたす様子にて、其團扇をさゝげしは、たしか娘に候」と、聞いてほく〳〵點き給ひ、人の手馴れてかけ香の、匂染みたるかの團扇を懷しげに打ながめ、月の小唄の一節に、御心や留りけん。「此團扇には尋ぬべき、仔細のあれば、此邊の、様子を詳しく知る者を、とく呼び參れ」と宣ふが端近なれば御聲の、表に漏れて聞えけん、「其様子は私が直に申上げませう。御免遊ばし下されまし」といと馴々しく年の頃、四十ばかりと思しき女、會釋なしつつ打通り、「私は四月頃お隣へ引越しました、凌晨と申す者。あなたへ團扇を上げたのは、黄昏といふ一人娘、むだ書のその小唄が、お目に留つて彼が仕合。お名は聞いて居りますれど、惟吉様にはしみ〴〵と、お目に懸るは今宵初めて。私は女子供へ、舞の指南が浮世のわたり。娘は近頃琉球より、傳をうけた三味線と、いふ物を

教へますれば、うへつ方のお耳馳れず、拙い業が又却つて、お慰にもなりませう。夫は疾に世を去りて、只今では寡ずみ、お氣遣な者はない。穢けれどもお客様を、お連れ申して參る様、娘もくれ〴〵申しました」と聞いて光氏うち微笑み、「夫こそは一興なれ、直に御身の家へ行かん。サア凌晨とやら案内」と立出で給へば惟吉は、こは輕々しき御有様と、思へど若き身の程を、顧つゝも詞に出さず。件の女の後につき、光氏は先に見し、あげ戸を潜り立入れば、二階の簾は皆下して、隙を漏れくる火の影は、螢よりけに哀れなり。黄昏も出迎へ、簾の陰に誘ひ申し、親子とり〴〵款待すにぞ、光氏は目馴れざる、住居の様も珍しく、彼方此方を打眺め「最前表に憩ふ折、板戸を二つ組合せ、上より衣を張りたるが、あれ〳〵表に今もあり、あれは何ぞ」と問ひ給へば、凌晨は二階より、表の方を透し見て「黄昏があなたに浮れ、忘れて夜干にしたさうな。秋も近いに夜露に濡らし、だいなしになつたであらう。あれは私の古帷子、戸張というて下々では、致す事でございます、」ト打笑へば光氏は、扇を以て拍子取り、

「*わいへんは、戸張帳をも華れたれば」と謠ふを凌晨引取つて、「ソリャ催馬樂の謠物、その戸張とは綾錦の、たれ衣の事なれば、あの戸張ではなけれども、わいへんとは我家の事ぢやと云へば唄ひかへて、我家は戸張てふをも干したれば、大君來ませ聟にせん。御肴には何よけん、鰒榮螺甲羸よけん。私が唄ひまするど、小唄の節になりまする。聟にせんとは幸先よし、御肴には娘が三味線磯馴小唄の貝盡し鰒、榮螺、甲羸かけて、騒いでお聞かせ申すばかり。」

――「諺紫田舍源氏」――

註　烏瓜　「田舍源氏」第四編下の一節。源氏物では「夕顔」の卷に當る。「六條あたりに忍びありきの頃」とあるところからで、光氏は光源氏。惟吉は惟光。黄昏は夕顔である。こゝに取つた終りの方だけは「源氏物語」と違つてゐるが、それまでは、そつくりである。　○烏瓜云々　「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めき」と源氏では隨身の語。

○君の光を　この小唄は、源語では「女あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕顔」とある夕顔を烏瓜に翻したのはさすがにうまい。　○投節　梛節と云ふがもとの名。延寶四年の「淋しき座の慰」にその曲として今度ござらば持てきてたもれ伊豆の御山のなぎの葉をとある。明暦頃島原柏屋の河内が上手の名をとりそれから流行したと云ふ。

○わいへん　前出（雅望の條）

曲亭馬琴

濱路芳流閣

馬琴略年譜　本名瀧澤解、通稱佐吉、著作堂、袋笠翁等號頗多い、

明和　四　年、六月九日、深川に生る、父は運兵衛興藏は川越浪人、
安永　四　年、父卒、兄左馬太郎、戸田家に仕ふ
寛政　二　年、京傳を訪ふ(二十四歳)。處女作「二十日餘十兩盡用而二分狂言」を出す
同　三　年、蔦屋に寄食す、
同　五　年、麹町飯田町の下駄屋に入婿す妻は會田氏(名は百)
同　七　年、讀本の初作、「高尾千字文」
享和　元　年、五月京攝に遊ぶ
同　三　年、「弓張月」前編(三十七歳)
文化　七　年、京傳と不和になる
同　十一年、「八犬傳」初輯(四十八歳)
同　十三年、この頃馬琴、讀本作家として名聲隆々この年京傳死、
文政　元　年、長男宗伯醫となる
文政　八　年、兎園會を起す(五十九歳)、
同　十　年、夏大病、この三月宗伯土岐路子と婚す、
同　十一年、「近世美小年錄」初篇、
天保　四　年、八九月、右眼失明(六十七歳)
同　五　年、松前老侯逝く、
六　年、宗伯歿、(三十八歳)、
七　年、八月十四日兩國萬八樓七十賀十月、信濃坂に移る
九　年、春、左眼を病む
十一年、失明、お路(琴童)に八犬傳口授、
十二年、妻歿(七十八)、八犬傳成る、
嘉永　元　年、十一月六日逝く、八十二歳、小石川、茗荷谷深光寺に葬る
○馬琴の作品三百數十、その中長篇の「讀本」だけでも三十篇に近い。

濱路

さる程に、信乃は臥房に入りしかど、曉るを待ばいもねられず、ひとりつく〴〵久後を、思ふ物から身ひとつを、誰はとめねど父母の、墳墓に今ぞ遠離る、里の名殘のいと惜き、こゝろはおなじ眞砂路の、濱路は臥房を脫出て、竭きぬ恨をいふよしも、納戸の鼾は、二親の、目覺ぬ程にと心のみ、せかれて逢ぬかたにさへ、なほ憚の關の戸の、音たてさせじと閾蹈む、膝は戰へて定めなき、浮世と思へば形なく、悲しく、つら〳〵、恨しき、郎の枕に近づけば、信乃は來る人ありと見て、刀を引よせ、岸破と起、誰ぞやと、問ば音もせず。原來癖者ござんなれ。わが寢息を窺ふて、刺も殺さん爲に歟と、疑へばいよ〳〵由斷せず、行燈の火先さし向けて、熟視れば濱路なり。端なくは得進まで、蝦の後

方に伏沈み、聲を立れど哽咽る、涙に外をしのぶ搨、紊れ苦しと喞つめり。強敵には懼れざる、壯客ながらうち騷ぐ、胸を鎭めて蛔を出、釣緒を解つゝ臥簟を片よせ、濱路は何等の所要ありて、更闌けたるに臥もせで、こゝへは迷ひ來給ひし。瓜田には沓を容ず、李下に冠を正さずといふ、諺あるをしらずやと、咎れば恨めしげに、涙を拂ふて頭を擧げ何しに來つると外々しく、いはるゝまでに形なき、妹脊は名のみ糾纏の、化結なる中なれば、しか宣ふも無理ならねど、一旦親の口づから、許し給ひし夫婦にあらずや。日來はとまれかくもあれ、今宵限りの別れぞと、告しらせ給ふとも、おん身の恥にはなるまじきに、出てゆくまでしらず貌に、唯一ト言の捨言葉、かけ給はぬは情なし。心づよしと怨ずれば、信乃は思はず歎息し、人木石にあらざれば、有繋に情をしりつゝも、嫌忌の中に身を措故に、口を開きて告るによしなし。おん身が誠はわれしれり。わが胸中をばおん身しるらん。許我は僅に十六里、三四日には往還するなるに、かへり來る日を俟給へと、賺せば濱路は目を拭ひ、左のたまふは僞りなり。一

トたびこゝを去り給はゞ、いかでかへり來給ふべき。籠鳥の雲井を慕ふは、その友をおもへばなり。丈夫の故郷を去るは、その祿をおもへばならん。さてもわが彼二がたは、愛敬憎惡定めなく、おん身を鬱悒くおもひ給へば、大約此度の起行も、出だし遣るもの、還るを樂はず、出てゆく人、留るをよしとせず。かゝれば一トたびこゝを去て、いづれの日にか還り給はん。今宵限りの別れにこそ。わらはが親は、四はしらあり。そはおん身もしり給はん。しかれども現在の、二親これを告給はず、仄に傳へ聞侍れば、實の親は練馬の家臣、胞兄弟もありと、ばかり聞えて、その姓名は定かならず。さればとて、養育の恩義を今さらに、化には思ひ侍らねど、產の恩も亦高かり。いかで實の親のうへ、しらまくすれど女子の甲斐なさ。人に告べき事ならねば、身ひとつに物を思ふなる、目睡まぬ夜の明がたの、夢にもがなと願言に、祈らぬ神はあらずかし。斯思ひつゝ年月を、送るはいとも苦しきに、去歲の四月は思ひがけなく豐島練馬の兩家滅亡、そが家隸老黨も、皆遺りなく擊れきと、風聞大かたならざれば、

さてはわが親同胞も、得こそは脱れ給はじと、思へばいとゞ哀しさの、やるかたもなき嘆きして、乾さぬ袖の片しぐれ、親には包む憂苦勞、切めておん身にうちあかさば、親同胞の名をも知らん。その陣歿の迹をしも、吊んよすがは、外になし。世にある限り連れまとふ、良人には何を隠すべき。繁き人目の關の戸に、鷄のそら音のあれかしと、思ふものから折もなき、折を稍得て近づけば、はやく母御に跟られて、遽迷ひて退きしは、去歳の七月の比なりき。これより後はいさゝ川、堰れて中は絶たれども、下ゆく水のかよひ路は、かはらぬ心の誠のみ。朝な夕なにおん身のうへ、恙もあらず世に出だし、富榮えさせ給はせと、禱らぬ日とてはなきものを、心つよきも限りあり、妻を棄給ふが伯母御へ義理歟。わらはが思ふ百分一、おん身に誠ましまさば、如此々々の故ありて、かへり來ん日は定めがたし。潛びて出よ、共侶にと、宣はするとも夫なり、妻なり。誰か密夫とて譏るべき。いと強面しと思ふ程、離れがたきは女子の誠、分つ袂にふり棄られて、あくがれて死んより、おん刃にかけてたべ。百年の後を

冥土にて、俟侍らんとかき口説く、いとも切なる恨のかず〳〵、泣音憧る干行の涙は袖に湛えたり。信乃はその聲外にや洩ん、心苦しと、いへばえに、岩井の水をむすびかけし、緣しをこゝに釋くよしなければ、愁然として嗟嘆しつ、又きたる手を膝に措き、やよ濱路、おん身が恨はひとつとして、理りならずといふよしなけれど、いかにせん、わがこの度の起行は、伯母御夫婦の指揮によれり。實は吾儕を遠離て、おん身に婿を招ん爲なり。素よりわれはおん身の爲に、夫にして夫にあらず。そはいひがたき二親の、底意を猜し給へるならん。然るを今さら情に攀れて、おん身を誘引出だしなば、誰か淫奔とはいはざるべき。留りがたきを留り給ふは、便ち是わが爲なり。去がたきを出てゆくも、亦是おん身が爲ならずや。縱へ且らく別るゝとも、迭にこゝろ變らずば、遂に全聚るときあらん。親達の目覺ぬ間に、とく〳〵臥房にかへり給へ。われ亦心がけんには、おん身が親をたづね考へ、存亡をしる便著もいで來ん。とく去給へと、諭しても、立もあがらず頭を掉り、濡れぬ前こそ露をも厭へ。二親のいざとく

て、こゝへ來つるを咎め給はゞ、わらはもまうす事待り。唯共侶にと宣はする、おん身の應を聞侍らでは、生て閾の外に出じ。殺してたべと、衝詰し、かよはき女子の魂も、こゝに居りて動かねば、信乃はほと〳〵困じ果て、潛びながらの聲を激し、さりとては亦聞わきなし。命あらば時もあらん。死ぬるが人の誠かは、たま〳〵伯母と伯母夫の、許しを得たる出世の首途、妨せばわが妻にあらず、過世の讐歟と、窘むれば、濱路はよゝと泣沈み、こゝろの願ひを遂んとすれば、おん身の仇になるよしを、諭し給ふに術もなし。とにもかくにも形なき、わが身ひとつの故ならば、思ひ絶て留まり侍らん。さらば道中恙なく、折から烈しき日まけせず、許我へ參りて名をも揚げ、家を興して、冬籠、北山颪吹く頃は、風の便にしらせてたべ。筑波の山のこなたには、恙もなくて君ますと、思ふのみにて侍りてん。今より弱る玉の緒の、たえなばこれを、この世のわかれ、憑むはまだ見ぬ冥土のみ。二世の契りは必よ、御こゝろ變らせ給ふなと、墓なき事を木綿襷、掛てぞ契る願言は、怜悧見えても恍惚子なる、未通女

ごころの哀れなり。信乃も有繋にうち芝折れ、慰めかねて點頭のみ。又いふよしも給はなん。とく〳〵と、いそがし立れば、濱路はやうやく立あがり、「天も明ばし給はなん。とく〳〵と、いそがし立れば、濱路はやうやく立あがり、「天も明ば狐に啖なん腐鷄の、未明に鳴て佚を遣つゝ」それは戀せし草まくら、是は旅ゆく妹脊のわかれ、鷄も鳴ずば天も明じ、曉けずば人の目も覺じ。恨しの鷄の音や。よに逢坂のあふ宵はあらで、ゆるさゐ關はわがうへに、有明の月ぞ果敢なきと、口實つゝ出んとすれば、外面に咳して、障子をほとほとうち敲き、鷄が謠ふて候に、いまだ覺給はずやと、呼起す聲は額藏なり。信乃は呼れて遯しく、應へをすれば額藏は、庖湢のかたに退きけり。疾くこの隙にと、出し遣らるゝ、濱路は瞼泣腫し、闇きかたより見かへれど、涙に霞む挾山形。紙張の壁に身をよせて、おのが臥房に泣にゆく。

——「八犬傳、第三輯卷之三」——

芳流閣

いにしへの人いはずや、禍福は糾纏の如し。人間萬事往として、塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將禍の伏する所、彼にあらば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極みを知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、紀の名刀、心に占めつ、身に傳けつ、艱苦の中に年を經て、得がたき時を得てしかば、はる〳〵許我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃は舊の物ならで、わが身を劈く讎とぞなりし、憾をこゝに釋よしもなく、緯急にして意外にあり。僅に當坐の辱を、避けばやと思ふばかりに、夥の圍を殺開きて芳流閣の屋の上に、攀登れども左右に、脱去るべき道のなければ、其處に必死を究めたる、心の中はいかなりけん、想像るだ

にいと痛ましし。されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫れし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、慇に擇出されつ、他の憂を自の面目に、今更用ひられん事、願しからずと、思へども、推辭て許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、彼樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞せて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく、堪がたき、頃は六月二十一日きのふもけふも乾蒸の、餘熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく、波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、溯洄は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟、楫を絶えて、進退既に谷りし、敵にしあればいかでわれ、繫ぎ留めんと賦の、樹傳ふ如くさらさらと、登果たる三層の、屋背には目柴翳すよしもなく、遙に透を窺ひつゝ、疾視あふて立たる形勢、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇の覘ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に尻をうち掛て、勝負怎生く、伺上たる。亦唯閣の東西には、身甲したる許多の士率、鎗長刀を晃

かし、或は箭を負ひ、弓杖突立、組で落なば繫留んとて、項を反してこれを觀る。加旃外面は、縣連として杳なる、河水遠りて砌を浸せば、たとひ信乃、武事長、膂力衰へず、よく見八に捷得るとも、墨氏が飛鳶を借ざれば 虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずも羅に入ぬ、獸ならずも、狩場に在り。三寸息絕れば、綽みな休まん。脫れ果じと見えたりける。そのとき信乃おもふやう、初層二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、砍落しつる後は、絕て近づくものもなきに、今唯ひとり登來ぬるは、よにおぼえある力士ならん。這般は是、膳臣巴提便が、虎を暴にする勇ある歟。又富田三郎が、鹿角を裂く力ある歟。遮莫一個の敵なり。引組で刺迭へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそ、ござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高漱の如き方桴に、立たる儘に寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、彼犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。然とても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役義に、擇出されし甲

斐もなし。搦捕るとも、擊るゝとも、勝負を一時に決せんものをと、おもひにければ些も擬議せず、御諚ざふと、呼かけて、拿つたる十手を閃めかし、飛ぶが如くに方桴の、左のかたより進登りて、組んとすれども寄つけず、こゝろ得たりと、鋭太刀風に、擊つを發石と、受留めて、拂へば透さず數刀尖を、拄て流す一上一下、辷る甍を蹈駐て、頻に進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ、手練の働き、岌よりおとす、大刀筋を、あちこち外す、虛々實々、いまだ勝負を判ざれば、廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠て、見るめもいとゞ迥なる。さる程に犬塚信乃は、侮がたき見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌倍して、刀尖より火出るまで、寄ては返す、太刀音被聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風發り、二龍靑譚に戰ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば、峯の霞歟夏なれば、夕の虹歟と、見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鏃、肱當の端を裏缺くまでに、切裂れしかど、大刀を拔かず。

信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、漸々に疼を覺れども、足場を揣つて、撓まず去らず、疊かけて擊つ大刀を、見八右手に受ながして、かへす拳につけ入りつゝ、ヤッと、被けたる聲と共に、眉間を望んで碪と打つ、十手を丁と取留る、信乃が刃は鍔際より、折れて遙に飛失せつ。見八得たりと、無手と組むを、そがまゝ左手に引著て、迭に利腕しつかと拿り、捩倒さんと、曳聲合して、揉みつもまるゝ力足、此彼ひとしく踏辷らして、河邊のかたへころ〳〵と、身を轆せし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削成したる甍の勢ひ、止るべくもあらざめれど、迭に拿たる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の、底には入らで、程もよし、水際に繫る小舟の中へ、うち累りつゝ撞と落れば、傾く舷と立浪に、ざんぶと音す水烟、纜丁と張り斷つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と虛潮に、誘ふ水なる洄舟往方もしらずなりにけり。

——「八犬傳、第四輯卷一」——

註

「南總里見八犬傳」が里見家の興隆を骨子として、それに所謂八犬士の忠勇義烈を配した浪漫的物語である事は云ふまでもない。通卷九輯百六册の大作で、馬琴は文化十年正月から天保十二年八月まで前後二十八年を費したのである。今こゝに採つた二場面は孰れも犬塚信乃を中心とするもので第三輯から第四輯へかけての一節である。今その前後の筋を簡單に誌す。その昔、里見義實と共に結城に籠つた大塚匠作の子番作は、姓を犬塚と改めて世にかくれた。一子信乃があつた。番作の異母姉龜篠は蟇六を婿としたが共に腹黑で、番作の所持する村雨の劍を奪はんとした。番作の死後、信乃はこの家に養はれた。龜篠には養女濱路がある。蟇六の小者犬川額藏は主人の奸計を信乃に告ぐ。濱路の戀。同村の百姓糠助が信乃に交り、臨終に當つて一子玄吉(犬飼現八)が足利成氏の家臣の許に居る事を告げる事などがある。又、左母次郎なるもの蟇六に語らはれ神宮川で信乃の村雨の刀をすりかへる。それを知らないで信乃は古河に赴く。

(一)濱路　信乃の家出後陣代籔川宮六の求婚を厭ひ、家をぬけ出る所を、左母次郎に捕へられ、且村雨の刀の事を聞き、彼を刺さんとして却つて殺される、この薄命な佳人を作者は、可憐と思つたか、その靈里見の姫君に移りたりとし、　○瓜田　瓜田不納履、李下不整冠(文選古詩)疑をうける樣な事はせぬがよい

その濱路姫が信乃と結緣するに至らしめた。

○よもあけば　この歌は「伊勢物語」にある。「昔男陸奥の國にすゞろに行きいたりけり」云々の條　(二)芳流閣　○禍福は　賈誼夫禍之與福兮、何異糾纆也(文選、鵩鳥賦)　○人間萬事塞翁馬　吉凶は交互に來るもの、意、(淮南子。人間訓)この故事を元僧、凞晦機の詠じた詩句、　○そは福の禍兮福所倚、福兮禍所伏(老子)　○浮圖　梵語で寺院の意、　○墨氏　墨翟、周の人、紙鳶の事は續博物志に見ゆ　○魯般　魯の人、公輸般、雲梯のことは惟南子に見ゆ　○膳臣　巴提便は欽明朝の人、百濟にて虎を擲殺す、

和歌五（江戸末期）

杉のしづく

良　寛　越後、出雲崎の人。家を出て備中玉島に行き、後歸郷して國上山の五合庵に住し、晩年山麓乙女の祠傍に移つた。詩、書をよくし、托鉢に一生を終つた。俗姓山本氏。天保二、正、六、寂。年七十四。

千種有功　飛鳥井家に學んだが、景樹や加茂季鷹に交つてその風をうけた。家集「千々廼屋集」がある。安政元、八、二八、葬。年五十八。

加納諸平　遠江白須賀の人。夏目甕麿の子。通稱小太郎柿園と號す。本居太平に學ぶ。鈴屋門流に於ける唯一のすぐれた歌人であらう。「柿園詠草」は家集である。安政四、六、二四歿。年五十二。

平賀元義　岡山の人沖津新吉直義とも源猫彦とも名乘つた。奇行に富み一生を不遇で終つた。萬葉風の詠草は明治の正岡子規をして共鳴せしめた。「平賀元義集」がある。慶應元、十二、六歿。年六十五。

安藤野雁　通稱力彌。奥州半田銀山の小吏の子。江戸に出て塙の門に入つた。漂泊の旅に暮し武藏胄山で歿した。奇行逸事に富む。「野雁集」がある。慶應三、三、二四歿。年五十八。

橘曙覽　本姓井手、名は尙事。福井の豪家の子。家を出でゝ清貧に甘んず。家集「志濃夫廼舍集」がある。明治元、八、二八、歿。年五十七。

大隈言道　通稱清助。福岡の人。家を弟に讓りて大觀に出て、後、鄕に去つた。家集「草徑集」がある。明治元、七、二九、歿。年七十一。

井上文雄　元眞と稱し、田安家の醫。江戸派の殿將と云ふべきで、晩年、歌によつて當路に咎められ入牢した。「調鶴集」、はその集である。明治四、十一、十八、歿。年七十二。

太田垣蓮月　名は誠子。鳥取の人、太田恒光古の女。三十餘で夫も子も世を去つたので、尼となつて、京東山に住み、手づくねの陶器を作つては糊口の代とした。清く寂しい一生であつた。「海士の刈藻」「蓮月歌集」がある。明治八、十二、十、歿。年八十三。

杉のしづく

紀の國の高野の奥の古寺に杉のしづくを聞き明しつゝ
飯乞ふとわが來しかども春の野にすみれつみつゝ野を經にけり
歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ

——「良寛」——

夷らがあとを清めて相模潟みちくる潮にうたふ舟人
おもしろき野中の月の夕かな蚯蚓笛吹き狸つゞみうつ

——「千種有功」——

棹ふれし筏は一瀨すぎながら猶かげなびく山吹の花
歸り來む宿は野分にあれにしをいつまで蜘蛛の夕ありきする

壁立てる巖とほりて天地に轟きわたる瀧の音かな（那智）

——「加納諸平」——

高田の加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠吹き放つ

大なむち神のみことは袋負ひ、をけのみことは牛かひましき

妹が家の向ひの山は眞木の葉の山が葉凉しく生ひ出でにけり

——「平賀元義」——

醉ひ亂れ花に眠りし夢さめてさむしろ寒し春の夕風

わが顏を壁の穴よりうかがひつ鼻の友と思ふなるべし

——「安藤野雁」——

春にあけてまづ見る書も天地のはじめの時の讀みいづるかな

すく〳〵と生ひたつ春に腹すりて燕とびくる春の山畑

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげに走る西へ東へ

凡人の耳には入らじ天地の心を妙にもらすわが歌

たのしみにあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時 ——「橘曙覽」——

窓に窓向ひあひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる

今日見れば少女になりぬ去年までは一足しても飛びしならずや

散る花に目をも送らず佛たち竝びおはする峯の古寺

いつよりか入相の鐘の鳴りつらむ心づきたるはての一聲

泣くものは大人にならじ泣くものは柿も與へじ梨も與へじ（童謠）

——「大隈言道」——

おもと人半蔀おろす袖口のあらはなるまで吹く野分かな

世の中は一人のめしひ杖つきて數多の盲目引き歩りきけり

さえ通る獄の夜床下ひえて寢られぬものを雪さへぞ降る

——「井上文雄」——

宿かさぬ人のつらさを情にておぼろ月夜の花の下臥

軒近き柳になびくかはほりのかげなつかしき薄月夜かな

里の子が機織る音もとだえして晝寐の頃のあつき旅かな
岡崎の月見に來ませ、都人門の畑芋煮てまつらなむ
川なみの夜々ごとに衣うつ音羽の里の秋ぞさみしき
はら〳〵と落つる木の葉に交り來て栗の實一つ土に聲あり
冬畑の大根の莖に霜さえて朝戸出さむし岡崎の里
めせ〳〵と炭うる翁聲かれて袖に雪ちる年の暮かな
あけたてば埴*もてすさび暮れゆけば佛をろがみ思ふ事なし

——「太田垣蓮月」——

註

杉の雫　流派によらず江戸末期の歌人の作を集錄した。たゞ良寛だけが天保に物故してゐるのみで他は安政以後明治に亙って亡くなった人々である。　○袋負ひ　八十神の荷物を負って大穴牟遲神がお伴した事、古事記神代卷、八に見ゆ　○をけ　哀祁。顯宗天皇、幼時播磨に流浪せられし時の話、天地のはじめ　天地初發之時（古事記冒頭の句）　○たのしみは　「獨樂吟」五十餘首の中から　○さへ通る　獄中の作。彼は時事の歌のために當路に疑はれて下獄した。

○埴もて　手づから陶器を製し、自詠を書く。

河竹默阿彌

大川端

默阿彌は通稱吉村芳三郎、江戸芝の人、五代目鶴屋南北の門に入り天保六年作者見習となつて河原崎座に出た、立作者になつたのは、同十四年十一月で、二代目河竹新七を名乘つた、安政三年市村座に移り、爾後こゝにあつて中村守田の兩座にも助筆した。明治十四年十一月新富座で島千鳥の後日狂言を書納めとして隱退し古河默阿彌と云つた。明治二十六年一月二十二日、七十八で歿した。彼の作品は二百餘種あるが、その得意とする所は「惡の世界」にあつた、「三人吉三」「鼠小僧」「鑄掛松」「髮結新三」等は惡人を中心としてゐる。彼は盜賊と共に毒婦を描いた、而して惡の華と云ふやうな蠱惑の美が創造されてゐる。場面としては殘忍な陰慘な刺戟の强いもの、卽ち殺人、脅喝、淫蕩と云ふやうな場面が多い。これは江戸末期の頽廢的思潮の反映に外ならない。彼の傑作は上記の外には「村井長庵巧破午」「白波五人男」(文久二年)「島衞月白波」(明治十四年)などがある。歌舞伎劇の大成者、江戸文藝の殿將とは彼の當然享くべき名稱であらう。

大川端

(大川端庚申塚の場)＝本舞臺四間中足の二重石垣波の蹴込み、上の方に四尺程の庚申堂、賽錢箱、軒口に青面金剛と記せし額、此脇に括り猿を三つ付けし額、後ろ練塀、斜に橋の見える片遠景、總て兩國橋北河岸の態。やはり波の音通り神樂にて道具留る。(中略)

おとせたち〳〵として思はず川へ落ちる、水の音波煙はつと立つ

お孃「あゝ川へ落ちたか(ト川を見込み)やれ可愛さうなことをした(ト云ひながら財布より百兩包を出し)思ひがけねえ此百兩」

トにつたり思入れ、此時後ろへ太郎右衞門伺ひ出で

太郎「その百兩を」

ト取りに掛るを突廻し金を財布へ入れ懷へ入れる、太郎右衞門又掛る、此時お孃吉三太郎右衞門の差してゐる庚申丸を鞘ごと引たくり、太郎右衞門それをと寄るをすらりと拔き振廻す。此途端花道

より垂を下せし四ツ手駕を擔ぎ來り、是を見て恂りなし、駕を下手へ捨て下手へ逃げて入る。太郎右衛門は白刃に恐れ上手へ逃げて入る。時の鐘、お孃吉三跡を見送りて

お孃「はて臆病な奴だな（ト駕の提灯で白刃を見て）むゝ道の用心丁度幸ひ（ト庚申丸をさし空の朧月を見て）月も朧に白魚の、篝も霞む春の空、つめたい風もほろ酔に、心持能浮か〳〵と、浮れ烏の只一羽、塒へ歸る川端で、棹の雫か濡手で泡、思ひがけなく手に入る百兩、（ト懷の財布を出しにつたり思入れ此時上手にて、厄拂ひの聲してお厄拂ひませう、厄落し〳〵と呼ばゝる）ほんに今夜は節分か、西の海より川の中落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から延喜がいゝわえ。

ト此折下手にある四ツ手駕の垂をばらりと上げる門にお坊吉三、吉の字菱の紋付の着附五十日鬘、大小の打扮にてお孃吉三を向ふ。お孃もお坊吉三を見てぎつくり思入れ時の鐘少し凄みの合方になり、お孃金を懷に入れ、庚申丸を袖にて隱し上手へ行かうとする、お坊吉三思入あつて、

お坊「もし姐さん、一寸待つておくんなせえ」

お孃「はい、何ぞ御用でござりますか」

お坊「あゝ用があるから呼んだのさ」

お孃「何の御用か存じませぬが、私も急な」（ト行きかけるを）

お坊「用もあらうが手間はとらさぬ、待てといつたら待つてくんなせえ」

ト是にてお孃ムゝト思入、お坊駕より雪踏を出し刀を持出てお孃を見ながら刀を差す、兩人顏見合せ氣味合の思入にて中腰になり

お孃「待てとある故待ちましたが、して私への御用とは」

お坊「さあ用といふのは外でもねえ、浪人ながら二腰たばさむ武士が手をさげこなたへ無心、どうぞ貸して貰ひたい」

お孃「女子をとらへお侍が貸せと仰しやる其品は」

お坊「濡手であはの百兩を」

お孃「え」（ト思入）

お坊「見掛けて賴む、貸して下せえ」

お孃「そんなら今の樣子をば」

お坊「駕にゆられてとう〳〵と、一ぱい機嫌の初夢に、金と聞いては見遁せねえ、心は同じ盗人根性、去年の暮から間が悪く、五十と纏る仕事もなく、遊びの金も困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入の振袖で人柄作りのお嬢さんが、追落しとは氣が附ねえ、是から見ると己なざあ、五分月代に着流しで小長い刀の落し差し、一寸見るから往來の、人も用心する折扨、金にならねえも尤もだ」

お嬢「それぢやお前の用と云ふのは、是を貸して呉れろとかえ」（ト懷から手を出し財布を見せる）

お坊「取らねえ昔と諦らめて、それを己に貸してくりやれ」

お嬢（せゝら笑ひ）「こりや大きな當違ひ、犬威しとも知ねえで、大小差して居なさる故、大方新身の胴試し命の無心と思ひの外、お安い御用の端した金、お貸し申して上げたいが、凄みなせりふでおどされではお氣の毒だが貸しにくい、まあお斷り申しませう」

お坊「貸されぬ金なら借りめえが、なり相應に下から出て免して呉れとなぜ言はねえ、木咲の梅より愛嬌のこぼるゝ娘の憎まれ口、犬威しでも、大小を伊達に差しちや歩かねえ、切取りなすは、武士の習ひ、きり〳〵金を置いて行け」

お嬢「いゝや置いては行かれねえ、ほしい金なら此方より其方が下から出たがいゝ。素人衆には大まいの、金も只取る世渡りに、未練に惜しみはしねえけれど、斯う云ひ掛つた上からは、空吹く風に逆らはぬ柳に受けちや居られねえ、切取なすが習ひなら命と共に取りなせえ」

お坊「そりやあ取れと言はねえでも、命も一緒に取る氣だが、お主も定めて名のある盗人、無縁にするも不便な故、今日を立日に七七日、一本花に線香は殺した己が手向けて遣るが、其俗名を名乘て置け」

お嬢「名乘れとあるなら名乘らうが、まあ己より其方から、七本塔婆へ書記す其俗名を名のるがいゝ」

お坊「こりや、己が悪かつた、人の名を聞く其の時はまあこちから名乘るが禮義、

爰が綽名のお坊さん、小ゆすり街、ぶつたくり押の利かねえ惡黨も一年增しに功を積み、お坊吉三と肩書の武家お構ひのごろつきだ」

お孃「そんなら豫て咄しに聞いた、お坊吉三おぬしが事か」

お坊「して又そつちの名は何と」

お孃「問はれて名乘るもおこがましいが、去年の春から坊主だのやれ惡婆のと妻を替へ憎まれ口もきいて見たが、利かぬ芥子と、惡黨の凄みのないのは馬鹿げたもの、其所で今度は新しく八百屋お七と名をかりて、振袖姿で持ぐゆる、お孃吉三と名に呼ばれ世間の狹い喰詰者さ」

お坊「己が名前に似寄り故、疾から噂に聞いて居たお孃吉三とあるからは、相手がよけりや猶更に」

お孃「此百兩を取られては、お孃吉三が名折となり」

お坊「取らねえけりあお負けとなり、お坊吉三の名の廢り」

お孃「互ひに名を賣る身の上に、引くに引かれぬ此場の出會」

お坊「まだ彼岸にもならねえに、蛇が見込んだ青蛙」

お孃「取る取らないは命づく」

お坊「腹が裂けても呑にやあ置かねえ」

お孃「そんなら是を爰へかけ」（ト お孃百兩包を舞臺前中央へ置く）。

お坊「蟲拳ならぬ」

兩人「此場の勝負」

ト兩人肌を脫ぎ一刀を拔き立廻ろ、よき程に花道より和尙吉三、紺の腹掛股引どてら半纏頰冠りに出で來り、此態を見て思入あつてつか〳〵と舞臺へ來り、

和尙「二人とも待つた〳〵（ト此中へ割て入り、双方を留る立廻り、結局和尙吉三着て居たる半纏を取つて兩人の切結ぶ白刃へ掛け此上へのり、双方を留め、三人きつと見得）。何ういふ譯が知らねえが、留に入つた待つて下せえ」（ト手拭をとる）

お坊「やあ、見知らぬそちがいらぬ留だて」

お孃「怪我せぬ中に」

兩人「退いた〳〵」

和尚「いゝや退かれぬ、二人の衆、初雷も早すぎる氷も解けぬ川端に、水にきらつく刀の稻妻、不氣味な中へ飛込むも、まだ知人にやならぬえが、顏は覺えの名うての吉三、いかに血の氣が多いとて大神樂ぢやあるめえし、初春早々劍の舞どつちに怪我があつてもならねえ。今一對の二人は、名におふ富士の大和屋に劣らぬ筑波の山崎屋、高い同士の眞中へ背い伸をして高島屋が、見兼て留めて入つたは、何なることゝ最前からお女中樣がお案じ故、丸く納めに綽名さへ坊主上りの和尚吉三、幸ひ今日は節分に爭ふ心の鬼は外、福は內輪の三人吉三、福茶の豆や梅干の遺恨の種を殘さずに、小粒の山椒の此己に、厄拂めくせりふだがさらりと預けてくんなせえ（トきつといふ。兩人も投はといふ思入あつて）

お坊「そんならこなたが名の高い」

お孃「吉祥院の所化上り」

お坊「和尚吉三で」

兩人「あつたるか」

和尚（頭を押へて）「さう言れると面目ない、名高いどころかほんのぴい〳〵、根が吉祥院の味噌すりで辨長といつた小坊主さ、賽錢箱から段々と祠堂金まで盜み出し、たうとう寺をだりむくり、鼠布子のお仕着の、淺黃と替り二三度も、もつさう飯も喰て來たが、非道な惡事をしねえ故、お上のお慈悲で命が助かり、斯うして居るが何より樂しみ、盜の科で取らるゝなら、仕方もねえが己が手に、命を捨てるは惡い了簡、仔細は後で聞かうから、不肖であらうが此白刄、己に預けて引いて下せえ」

お坊「いかにも、和尚が詞を立て、向うが預ける心なら、此方はこなたに預ける氣」

お孃「そつちが預ける心なら、此方も共々預ける氣」

和尚「そんなら二人が得心して」

お坊「此場は此の儘」

お嬢「こなたに預けて」

和尚「引いて呉れるか」

お坊「いざ」

お嬢「いざ」

兩人「いざ〳〵〳〵」

ト和尚吉三、半纏を取る、兩人刀を引いて左右へ別れる。和尚思入あつて、

和尚「して二人が命を掛け、此爭ひはどういふ譯」

お嬢「元は根も葉もない事で、おれが盗んだ其百兩」

お坊「貸せといふより言ひ掛り、つひに白刄の此爭ひ」

和尚「むゝそんなら二人が百兩を貸す貸すめえと云ひ募り、大切の命を捨てる氣、そいつあ飛だ由良之助だが、まだ了簡が若い〳〵。爰は一番己が裁きを付けようから、厭でもあらうがうんと云つて話に乘てくんなせえ、互に爭ふ百兩は二つに割つて五十兩、お嬢も半分お坊も半分、留に入つた己にくんねえ、其の埋草に和尚が兩腕、五十兩ぢや高い物だが、拔いた刀を其儘に、鞘へ納めぬ己が挨拶、兩腕切つて百兩の額を合せてくんなせえ」

ト和尚吉三腕まくりをして兩人へ腕を突附る。兩人感心の思入れ、

お坊「流石は名うての和尚吉三、兩腕捨てゝの此場の裁き」

お嬢「切られぬ義理も折角の志し故詞を立て」

お坊「こなたの腕を」

兩人「貰ひましたぞ」

和尚「おゝ遠慮に及ばぬ、切らつしやい」

ト和尚吉三腕を突出す、お坊吉三お嬢吉三と顔見合せ思入あつて、一時に和尚の腕を引き、直に二人共我腕をひく、和尚是を見て。

和尚「我兩腕を引いた上、二人が腕を引いたのは」

お坊「物は當つて碎けろと、力にしてそこなたの魂」

お嬢「お互ひに引いた此腕の流るゝ血汐を汲交し」

お坊「兄弟分に」

お嬢「なりたい」

兩人「願い」

和尚「こいつあ面白くなつて來た。實はこつちもさつきから然う思つては居たれど、自惚らしく言はれもせず默つて居たがそつちから頼まれたのは何より嬉しい。」

お坊「そんなら二人が望を叶へ」

お嬢「兄貴になつてくんなさるか」

和尚「イヤならねえでどうするものだ。聞きゃお隣座は水滸傳役者の揃つた豪傑に所詮及ばぬ事ながらこつちも一番三國志、桃園*ならぬ塀越の梅の下にて兄弟の義を結ぶとは有難え」

お坊「幸ひ爰に供物の土器」

お嬢「是でかための血盃」

ト お坊庚申堂より供物の土器を出し、三人是へ腕の血を絞り、

兩人「まづ兄貴から」

和尚「そんなら先へ」。

ト和尚呑んでお坊へさす、お坊呑んでお嬢へさすお嬢呑んで和尚へ返す

和尚「是で目出度く（ト和尚呑んだ土器を叩きつけ微塵になし）碎けて土となる迄は」

お坊「變らぬ誓ひの」

お嬢「兄弟三人」

和尚「思へば不思議な此出會、互に姿は變れども心は變らぬ盗人根性」

お坊「譬にもいふ手の長い今年は庚申年に」

お嬢「庚申堂の土器で義を結んだる上からは」

和尚「後の證據に三疋の額に附けたる括り猿」（ト和尚庚申堂に掛けてありしくゝり猿の額を取つて二人に一つ宛遣る）

お坊「三つに分けて一つ宛」

お嬢「守りへ入れて別るとも」
和尚「末は三人繋がれて」
お坊「意馬心猿の馬の上」
お嬢「浮世の人の口の端に」
お坊「斯ういふ者があつたりと」
和尚「死んだ後迄惡名は」
お嬢「庚申の夜の話し柄」
和尚「思へばはかない」
三人「身の上ぢやなあ」（ト三人宜しく思入あつて）
和尚「さあ長居は恐れ二人ともに此百兩を二つに分け」（ト以前の百兩包を取つて出す）
お坊「いや其百兩は二人が捨つる命を救はれし」
お嬢「禮といふではなけれども、爭ふ物は中よりと」
お坊「そりやあこなたが納めて下せえ」

和尚「いゝや是は受けられねえ、是非とも二人に半分宛」
ト百兩包を捻切り、一寸目方を引いて兩方へ出す是にてお坊お嬢顔見合せ思入あつて金を受取り、
お坊「そんなら一旦受けた上」
お嬢「又改めておぬしへ」
兩人「返禮」（ト兩方より出す）
和尚（思入あつて）「むゝ夜がつまつたにべん〳〵と、義理立するも面倒だ、いなやを云はず此金は志し故貰つて置かう」（ト和尚金を取つて鼻紙へ包み）
お坊「それで二人が」
兩人「心も濟む」
和尚「この返禮は又其中」
お坊「思ひ掛けねえ力が出來」
お嬢「祝ひに是から」
ト三人立上る、此時以前の濁舅兩人窺ひ出で

駕舁「うぬ、盗人め」

ト和尚にかゝるを左右へ突きやるお坊お嬢引附けて、

和尚「三人一座で」

ト兩人ムゝと點頭、一時に投退け駕舁起上らうとするをお坊踏附けお嬢は腰を掛け押へる、和尚は半纏を引掛る、三方一時に木の歌

三人「義を結ばうか」（ト三人引張、宜しく波の音、舟の驅ぎ唄にて）　拍子幕

註

大川端　安政七年（萬延元年）正月、作者四十五歳の時、市村座での書卸しで所謂白波物の傑作の一「三人吉三」からとつたこゝは第二幕目の返し、「大川端庚申塚の場」に當り全曲は七幕十四場の「賑かなもの」。　○蟲拳　拳の一種。拇指を蛙、食指を蛇、小指をなめくじに擬す、所謂「三すくみ」によりて勝負を決す。　○大和屋　岩井粂三郎（六世半四郎）お嬢吉三に扮す。　○山崎屋　河原崎權十郎。お坊吉三に扮す　○高島屋　市川小團治（四世米升と云ふ）和尚吉三に扮す、　○もつさう飯　もつさう（物相）に盛つた飯、獄中の飯。　○桃園　支德、關羽、張飛の盟約せし所

江戸文學選集

大正十三年一月十六日印刷
大正十三年二月一日發行

著作者　鈴木敏也
發行者　中村時之助　東京市神田區表神保町十番地
印刷者　柴山則常　東京市本郷區駒込林町一七二
印刷所　合資會社杏林舍　東京市本郷區駒込林町一七二

著作權所有

定價金參圓參拾錢

發行所　東京市牛込區市ヶ谷甲良町三十九番地　中文館書店　電話牛込三三二五番　振替東京三八四二七番

奈良女子高等師範學校教諭
及川久太郎先生

創作 自在 物理實驗室

再版

菊判全一冊洋綴
紙數約四百頁
挿畫約二百
定價金三圓
送料金十八錢

鮮明なる二百の挿畫と簡潔なる講義とは學生自ら實驗室に於て先生の實驗を參觀し體得するに等し

文學士
福富一郎先生

バイル博士 教育心理學概論

再版

全一冊洋綴
紙數五百廿頁
定價金三圓十錢
送料金十八錢

科學的教育研究の權威!!篤學なる我福富先生に據り完全に譯出はれり。然も文章又流暢豐麗錦上更に花を添ふ

東京帝國大學文學部教授
文學博士
吉田靜致先生

同圓異中 心主義と 道德生活

新刊

全一冊洋綴
紙數五百頁
定價金三圓半十錢
送料金十八錢

現代社會を倫理學的に解剖批判したる先生の一大警鐘!!國民道德生活の原理!!教育家諸君に必讀を希望して就中文檢受驗者諸君の良參考書

文部省普通學務局

就學兒童 保護施設の研究

新刊

全一冊洋綴
五百頁挿畫約百口繪二葉
定價金三圓五十錢
送料金十八錢

兒童の保護と鑑別、低能兒特殊兒童の身體精神病弱兒、劣等兒教育、兒童教養、兒童の相談等特殊兒童の科學的研究

文部省囑託
川本宇之介先生

デモクラシーと 新公民教育

新刊

全一冊洋綴
紙數五百五十頁
定價金四圓十錢
送料金十八錢

デモクラシーの根本的(倫理、哲學、宗教)並實踐的(國家、社會)學理の闡明に努力し公民新思想の正しき涵養を圖らんとした斯界の權威

東京高等師範學校教授
可兒德先生
日本體育會體操學校教授
石橋藏五郎先生

實際 競技と遊戲

六版

菊判全一冊洋綴
紙數六百頁
挿畫貳百餘
定價四圓五十錢
送料金廿七錢

小學校に於ける競技と遊戲の軌道運動會の指針として好評如湯就中文檢受驗者の必讀要書である

日本體育會體操學校教授
石橋藏五郎先生
大阪府立夕陽丘女學校教諭
寺岡英吉先生

小學校に於ける 遊戲教授法眞髓

新刊

菊判全一冊洋綴
紙數壹百五十頁
定價金七十五錢
送料四錢

本書は石橋寺岡先生が遊戲教授法の眞髓を確且簡明に說述せられたる教育家諸君の秘鍵である

東京女子高等師範學校訓導兼教諭
堀七藏先生

科學世界 空中之自然

三版

菊判全一冊洋綴
紙數三百三十餘
挿畫百
定價貳圓
送料金十貳錢拾八錢

本書は吾人の生活なくてはならぬ空氣と水の變化則ち自然現象を兒童本位に面白く說述したものである

東京女子高等師範學校訓導兼教諭
堀七藏先生

科學世界 發明と文明

三版

菊判全一冊洋綴
紙數三百八十頁
挿畫貳百
定價金參圓
送料金十八錢

吾人の祖先!!原始時代の生活より科學の粹を極めたる現今に至る迄その進歩を一一挿畫を加へ平易に說述したものである

東京帝國大學農學部教授
澤村眞先生

科學世界 飲食物の話

再版

菊判全一冊洋綴
紙數四百八十頁
挿畫五十
定價金三圓
送料金十五錢八十錢

吾人の生存は空氣と水とに何人も食物の大切なる事を知らぬ人は稀です。科學的知識を持つ公人の所以であります。然し本書は蓋し

大正十一年十月

文部省教員檢定試驗 附試驗問題集

受驗者案内

新刊

四六判全一册洋裝紙數百餘頁 定價金壹圓廿錢 送料金四錢

文檢受驗者の無試驗合格者の範圍受驗者の資格、その他受驗に關する慣例手續書式一切の指針である

文學士 上野陽一先生

兒童心理學精義

八版

四六判全一册洋綴背皮紙數八百頁 定價五圓廿錢 送料金廿七錢

廣汎たる最近の兒童心理學界を貫きて電光の如く輝き渡れる斯界の權威は今や篤學なる上野先生の手に漸く成る

東京高等工業學校附屬補習學校講師 川本宇之介先生

增實業訂青年 大正修身訓

前期卷壹、貳 後期卷壹、貳

新刊

菊判全四册和綴紙數各百卅頁 定價各四拾八錢 送料各四錢

修身教授の革新は教科書改革が最も緊急を要するのは言を待たない 之卽ち本書の公刊せられた所以である

東京高等工業學校附屬補習學校講師 川本宇之介先生

增補修身教授革新に就て

新刊

全一册無代進呈

本書は修身教授の革新に就て先生の意見を公にせられたる堂々五十頁に渡る大論文である

東京高等師範學校講師 野口源三郎先生

第七回オリンピック 陸上競技の印象

三版

全一册洋綴紙數三百五十頁 定價口繪二十五葉 送料拾八錢

本書は大會に參加したる野口先生が我選手の苦戰列國選手の模範競技を科學的に批判したる我國競技の選手諸君の好指針

文學士 上野陽一先生

兒童精神檢査法指針

八版

四六判全一册洋綴紙數三百頁插畫卅 定價金貳圓 送料金拾八錢

本書の内容は兒童研究指南の一句に盡きるどうして兒童を研究すかの概論に就て詳說したものである

前奈良女子高等師範學校訓導 齋藤諸平先生

發動主義 分團教授一斑

三版

四六判全一册洋綴紙數三百八十頁 定價金貳圓廿錢 送料金拾八錢

本書は先生が經營實施三ヶ年その教育の能率增進法を具體的說述せられたるものである

大正十一年九月改正

現行小學校令

及學事關係法規集

四版

四六判全一册洋裝紙數百八十頁 定價金七拾五錢 送料金四錢

大正九年三月改正

現行學校衛生法規

及通牒照會回答關係事項

新刊

四六判全一册洋綴紙數百五十 定價金六拾錢 送料金貳錢

芳賀矢一校閱 石原ばんがく作歌 田村虎藏作曲

野外散歩 自然唱歌

再版

全一册假綴 定價金六錢 送料金貳錢

小學校に於ける唱歌科教材として敢て提供す 乞ふ申込み無代進呈す

東京高等工業學校附屬補習學校講師 東京市視學
川本宇之介先生

都市青年 實業新讀本

前期卷 壹、貳
後期卷 壹、貳

新刊

全四册各册和綴
插畫コロタイプ版原色版寫眞版各二十圖
定價各金六拾錢
送料各金四錢

商工的都市青年に適應する事插畫原色版、タイプ版、寫眞版。西洋木版凸版二十圖を配し生徒の興味を喚起するに努めたる事趣味多き讀もの十數課を課外として採錄せる事

大正十一年增訂版

中學程度入學準備 模擬試驗五十回

國語の部、算術の部、地、歴、理の部

百版

各册袋入カード式
定價各金卅八錢
送料各册貳錢

問題の基本國定教科書を經とし實際行はるゝ各種學校の入學試驗問題を集め緯とし系統的に配列したるものであります

九州帝國大學醫學部教授 醫學博士
櫻井恒次郎先生考案

體操人形

再版

人形二組箱入
解說書附
定價壹圓四拾錢
送料拾八錢

此の至極簡單なる人形には生物中最も靈妙を具へたる人間以上明瞭に體操學理を講義する不思議なる人形である

帝國美術院會員 東京美術學校教授
岡田三郎助先生
太田三郎先生

學校家庭 略畫の描き方

四版

全一册洋綴箱入
作畫二千餘
彩色作畫百餘
附錄應用索引
定價參圓五拾錢
送料金拾八錢

最少の時間と手數で至極簡單にそのものゝ生態活動を描くが略畫の本能である本書は兩先生が近來の力作群畫帖の大企及し能はざる

東京高等工業學校附屬補習學校講師 文部省囑託
川本宇之介先生

郡村青年 大正新讀本

前期卷 一、二
後期卷
高級用

新刊

和綴全五册
紙數各壹百七十頁餘
插畫アート紙印刷原色版二十數圖を配し生徒の興味を喚起するに努めたる事各圖アート紙印刷鮮明寫眞版各一圖亞鉛凸版寫眞版各十五圖
定價各金六拾錢
送料各金四錢

郡村の青年に適應する樣編纂に最も努力したる事、插畫は原色版、鮮明寫眞版、西洋木版亞鉛凸版二十數圖を配し生徒の興味を喚起するに努めたる事就中趣味多き讀もの十數課を課外に採錄し生徒の自學自習に供せる事は著者の編纂に最も意を用ひたる所である

中等學校受驗準備研究會編

中學程度入學準備 綴り方

模範文と其作り方

新刊

全一册
約二百五十頁
定價金八拾錢
送料金四錢

「模範文」は全く兒童諸子の心血を注げる苦心の力作、その作り方は編者が綴り方の宿題に就て一々よく分る樣叮嚀に指導したものであります

主幹文學士ドクトル 久保良英先生
編輯主任文學士 青木誠四郎先生

幼兒之研究

毎月一回發行

一册
定價金參拾五錢
郵稅金壹錢
六册前金貳圓拾錢
郵稅不要

本誌は家庭と幼稚園と尋常一二年の幼兒を而已研究發表するその理論が苦心研究の發表であるされば皆すべて實際は合らしく然も皆すべて間に合ふ兒童養護に缺く事の出來ぬ重要事を毎號提供す

奈良女子高等師範學校教諭 衆訓導
仲本三二先生

實驗新主義算術教授

實際篇尋常科一學年

三版

判全一册洋綴
紙數百頁插繪十
定價金八拾錢
送料金四錢

實驗新主義算術教授世に出て茲に半歲既に五版に發賣の盛況である所の界の最も渴望せる實際篇は成れり著者多年の體驗により得たる哲學的金玉文字教育實際家の必讀研究を推奨す

東京帝國大學文學部講師 文學士ドクトル 久保良英先生

兒童研究所紀要 1 2 3 4

合輯

大判全一冊洋綴 背皮四方淵皮天金紙數壹千壹百頁餘 插畫三百五十圖・着色石版一 定價九圓五拾四錢 送料金五圓五拾錢

研究の紀要を公刊する事第四回に及ぶ既に學術界教育界は等しくその眞價を認識し今や本書を繙かずして兒童の研究を語るの資格なきに激稱せり。今回五卷の公刊に臨み曩の四卷分を合輯し學校教育家の爲め特に實費を以て頒つ敢て乞ふ必讀研究な

東京帝國大學文學部講師 文學士ドクトル 久保良英先生

兒童研究所紀要 五卷

再版

大判全一冊洋綴 紙數三百頁餘 插畫數十圖 定價參圓八拾錢 送料金拾八錢

奈良女子高等師範學校教諭兼訓導 仲本三二先生

實驗新主義算術教授

四版

全一冊洋綴 紙數五百五十頁 插畫八拾圖 定價參圓五拾錢 送料金拾八錢

新主義數學の系統的研究の發表せられたるもの蓋し本書あるのみ然るに其の研究の徹底の稀なるは近來の研究界の好著である

東京帝國大學文學部講師 文學士ドクトル 久保良英先生

智能査定用具

新刊

ボール紙型盤附 一揃 金參圓 送料金拾八錢

久保先生の改訂せる智能査定法は我が學界の誇である。今その用具を製作して益々斯法應用者の便利を計ることになつた

東京女子高等師範學校教諭兼訓導 堀七藏先生

堀實驗理科教授

三版

全一冊洋綴 紙數九百頁餘 插畫三十圖 定價五圓參拾錢 送料金貳拾七錢

理科教授の理論と實際の一切を包含する當代の權威。提れその鍵は開けよ目して教育家諸君の努力を俟つ

奈良女子高等師範學校訓導 鶴居滋一先生

兒童學習ノートの研究

再版

全一冊洋綴 紙數二百五十頁餘 插畫六十有餘 定價金貳圓 送料金拾貳錢

自由教育上より觀たる兒童學習ノートは最も偉大なる師であり亦友である。況やノートは經濟上於て公なるや本書は徹底したる理論と適切なる實際數百種を示し餘す所なし

東京高師教授 可兒德先生 群馬縣女師教諭 高野常政先生

理論實際 女子體操遊戯

三版

全一冊洋綴 紙數六百頁餘 插畫百十餘 定價參圓八拾錢 送料金拾八錢

少女より處女に到る過度時代の體育は如何に指導すべきか本書は徹底したる理論と適切なる實際數百種を示し餘す所なし

奈良女子高等師範學校教諭及川久太郎先生

適應自在 化學實驗室

三版

全一冊洋綴 紙數三百五十頁 插畫約七十餘 定價貳圓八拾錢 送料金拾八錢

裝置の簡易にして結果の確實なる然も初等理化の研究者の趣味多かる可きも約四百を以て鮮明なる插畫を以て懇切叮寧に詳說す

農商務省技師 農學士 内田清之助先生

科學世界 鳥學講話

再版

全一冊菊判洋綴 紙數三百五十頁 着色插畫一圖 定價參圓八拾錢 送料金拾八錢

鳥に關する智識の一切を其他二百五十頁に附録したる鳥の大學と内容簡明なる興趣湧くが如し學校家庭に於ける科學教材の理想の理科教授の理論と實際の絶好の參考書館と動物園と

文部省囑托 文學士 青木誠四郎先生

低能兒及劣等兒の心理と其教育

再版

全一冊洋綴 紙數五百五十頁餘 插畫八十 定價參圓五拾錢 送料金拾八錢

生理的心理の特性を詳述して之に應ずる眞の教育の方法を示し、その發生の原因を述べ、その豫防方法を詳說せられたるものである

329
249

前東京女子高等師範學校教諭
東京女子美術學校教諭
山本きく先生

新撰裁縫教授法

再版

四六判全一冊洋綴紙數三百頁插繪百
定價貳圓貳拾八錢
送料金拾八錢

本書は理論に於て實際に於て學界の權威山本先生に依て成る學校教育家就中文檢受驗諸姉の好指針である

前東京帝國大學文學部講師
廣島高等師範學校教授
ドクトル文學士
久保良英先生

兒童研究所紀要 六卷

新刊

大判全一冊洋裝紙數四百頁插繪數十
定價參圓八拾八錢
送料

本研究所の紀要公刊する事既に五回學術界教育界は等しくその眞價を認識し今や本書を繙くすべかりし兒童の研究の資格なき迄に激賞せられたる現代教育學の根底

東京高等師範學校教授
文學士
楢崎淺太郎先生

兒童青年 精神力學的研究

新刊

菊判全一冊洋綴紙數五百五十頁
插繪約百圖
定價四圓八拾錢
送料

本書は十數年間著者が忠實に我が國の事實に基いて研究した兒童青年の新研究新年續發達の新研究科學である

廣島高等師範學校教授
ドクトル文學士
久保良英先生

精神分析法

增訂三版

四六判全一冊洋綴紙數約六百頁
定價參圓五拾八錢
送料

現下教育界の大問題「性」の教育とその取扱ひの根本的解決を闡明した兒童研究の基礎學上の一大要書である

東京女子高等師範學校教諭
兼訓導
堀七藏先生

堀實驗理科教授

實際篇尋常科四學年

新刊

四六判全一冊洋綴紙數約六百頁
插繪百餘圖
定價四圓五拾錢
送料金拾八錢

堀實驗理科教授法は公刊せらるゝや好評激賞半歲にして四版を重ねた。その實際篇たる本書の斯界に重きを成すやは敢て喋々を要せず。誠に實際教育家諸君の一大寶典である

223
133

18.6.13

終